

「株式会社名画座」社長・鈴木修典さんに聞く

# シネコンとミニシアターという「二刀流」で映画文化を支える経営

2025年、映画の興行収入は歴代最高の2,744億円を記録し、大豊作の年といわれました。しかし、映画館の数は減少傾向で特に地方の小規模な映画館は運営が厳しい現状にあります。そのような中で、福島県いわき市でおよそ90年にわたって映画館を運営する「株式会社名画座」は、時代の変化に合わせた選択で経営を続けてきました。震災後はターゲットを明確に切り分け、シネコンとミニシアターというあえてタイプの異なる2つの施設を運営することで、幅広い客層を映画館に呼び込むという戦略をとっています。同社代表取締役社長の鈴木修典さんに、両極にある映画館の運営に至るまでのお話を伺いました。



映画文化の火を絶やさないという決意を持った鈴木社長のもとに、ゆかりのある俳優さんや監督さんらが応援に駆けつけた。

名画座が運営している2つの映画館のうち、1つはJRいわき駅から歩いてすぐの場所にある「まちポレいわき」です。仕事や学校の帰りに気軽に立ち寄れる利便性が魅力の映画館で、上映作品はアート系をはじめとする単館系作品が中心。コアな映画ファンを惹きつけています。一方、郊外にあるのは、「ポレポレシネマズいわき小名浜」。海辺に建つイオンモール内にあるシネコンで、話題の最新作を鑑賞したい人や、ドライブを楽しみながら、映画鑑賞と買い物や食事を同時に済ませたいファミリー層に人気の映画館です。

## 映画館のまちにおける役割とその変遷

名画座の歴史は約90年前、1931年に鈴木修典さんの曾祖父が創業した映画館「世界館」<sup>たいら</sup>まで遡ります。「世界館」は、平駅（現JRいわき駅）前で、大手映画制作会社の大映系の作品を上映する映画館として誕生し、いわき市民に交流と娯楽の場所を提供してきました。

1960年代後半になって平駅前的小区画整理が始まると、鈴木家は現在の場所に4階建ての世界館ビルを建設します。3、4階に「アポロ座」「平東宝」の2館を呼び込み、自らも映画館を引き続き運営。ただし、名前は「世界館」から「平大映」と改めました（2年後、株式会社大映が倒産すると「平ロマン」へと改名）。1階にはパチンコ屋、他のフロアには喫茶店や雀荘なども入れて、当時は珍しかった集約型の複合娯楽施設としてスタートしました。



映画館の未来を熱く語ってくれた「世界館」を創業した曾祖父。鈴木社長。



昔の「世界館」の前で「忠臣蔵」のプロモーション。



1973年には、近隣の老舗映画館が世界館ビルの地下に移転してきて、さらに5階を増築して小劇場をオープンさせるなど、世界館ビルは地域の文化の拠点となります。

その後しばらくは、ビルオーナーとして劇場運営を外部企業の平テアトルに委託していました。しかし、1995年に鈴木さんがいわき市に戻ると、当時の社長であった父親と映画館の方向性について話し合うようになり、2008年に4代目として鈴木さんがビルオーナーとして映画館を直営する決断を下しました。

「映画の黄金期にはいわき市内では40軒近くの映画館が軒を連ねていました。それが、ひたひたなか市にあるシネコンへと若者が流れるようになって……。気づけば、映画館は平テアトルと平東宝だけになっていました。でもそれも閉館するという事態に。そのような状況で、まちの文化の一部として形態は変わっても、うちはずっと映画館に携わってきたわけですから、どうにか残したいと思ったんです」

こうして2009年には「平テアトル」と「平東宝」の経営を引き継ぎ、「ポレポレいわき」としてリニューアルしました。5スクリーン体制の“日本一小さいシネマコンプレックス”と称しての挑戦でした。

## 震災を乗り越えてまちに灯った希望

「実際に自分でやってみると、映画館の運営は楽なものではありませんでした」と鈴木さん。人件費や電気代の高騰、施設の老朽化といった厳しい現実に直面しながらも、「映画館を残したい」という決意を揺るぎないものにさせたのは、「ポレポレいわき」のリニューアルから2年後の2011年3月11日に起きた東日本大震災での出来事でした。

いわき市を襲った震度6弱の激震。不安な避難生活が続く中、地元子どもたちから上がっ



大きな揺れ、津波、原発事故と、いわき市も大きな被害を受けた。

たのは「ドラえもんが観たい」という切実な声でした。連日、震災のニュースが流れ、原発事故の見えない不安に包まれる日々で、「こんな時に娯楽を提供していいのか」という葛藤もありましたが、鈴木さんは震災から3週間後、地震で倒壊した映写機を修理し、映画館の再開を決断しました。

「ゴースタウンのように静まり返ったまちに、映画館の明かりが灯った」と、再開を喜ぶ地元の人々の反応は、想像以上に大きなものでした。この時、「映画館にはまだ果たすべき役割がある」と確信したといいます。

## シネコン参入で12億円の負債を背負う

鈴木さんがシネコン運営に乗り出す転機となったのは、震災後の復興事業として、いわき市郊外の小名浜に「イオンモールいわき小名浜」の建設計画が持ち上がったことでした。イオンモールのような大型商業施設には、系列のイオンシネマが入るのが通例です。しかし、参入を巡る交渉は2年間に及び混乱。

「映画業界では、興行収入の約5～6割が配給側に、残りの4～5割が劇場の取り分と相場が決まっています。そこから固定費を支払うため、チケット収入だけでは利益が出にくい構造です。加えていわき市の商圈は小さく、こうした収益構造や商圈リスクから大手チェーンは進出に慎重な姿勢を崩しませんでした」

しかし、モールの集客に映画館は不可欠。結果として「地元の企業がやるしかない」という流れになり、名画座に白羽の矢が立ったのです。

地方の独立系企業が最新の巨大シネコンを運営するのは、一見、無謀ともいえる挑戦でした。最新のデジタル映写機や音響システム、快適なシートへの投資に加え、モール併設の条件として課せられた膨大な駐車場の整備費負担。当初9億円を見込んでいた建設費は、最終的に12億5,000万円まで跳ね上がりました。

それでも鈴木さんが手を挙げたのは、長年地域文化を支えてきた自負に加え、震災復興の趣旨に基づく「地域商業者優先」の取り決めがあったからです。地元の映画文化を絶や



人気のポップコーン。量もたっぷり。



イオンモールの中にある「ポレポレシネマズいわき小名浜」は東北最大級のスクリーンを設置。目の前には小名浜の海がひろがる立地を生かし、内装は小名浜の海を象徴する「青」を基調としてリゾート感を演出。



したくないという名画座の熱意に、地元自治体や金融機関も全面的な協力を約束し、地域一丸となって背中を押されたことで、12億円の借金を背負う覚悟が定まりました。

## 地域の未来を照らし続ける2つの映画館

こうして2018年、9スクリーン・約1,500席を誇る「ポレポレシネマズいわき小名浜」が産声を上げました。一方で、駅前の「ポレポレいわき」は名称を「まちポレいわき」に変更。大作上映を小名浜のシネコンへ集約する代わりに、ミニシアター系やドキュメンタリーを専門に扱うアート中心の映画館へと変貌を遂げました。役割とターゲットを明確に分けることで、経営リスクを分散し、2つの拠点を絶妙なバランスで運営します。

現在、シネコン部門は着実に黒字を継続しています。経営を支えているのはポップコーンなどの飲食やグッズ販売で、これらが貴重な収益源だと鈴木さんは説明します。チケット収入以外の部分でいかに収益をアップさせるかが経営のポイントで、スクリーンを貸切れるプランを用意したり、広告動画の制作をしたりと工夫をしています。例えば、いわき市出身の相撲芸人・あかつさんを起用した地元の方言を交えたオリジナルの“マナーCM”を制作。上映前に流すと、「おもしろい」と話題になりました。この動画は広告デモンストレーションの1つで、上映間のCM枠の存在を地元企業に知ってもらい、広告利用してもらいたいという狙いがありつつ、地域の経済を循環させたいという想いもありました。



地元出身の芸人あかつさんを起用した、いわき弁のマナー動画が好評。映画館で体験してみてください!

「イオンモール内の店舗やいわき駅前の店舗のCMを流すことで、小名浜といわき駅前という離れた地域をつなぎたい。映画の回数券は、『ポレポレシネマズいわき小名浜』と『まちポレいわき』の両館で使用できるので、市内を人が行き来してくれたら、いい経済循環ができ、地域に貢献できます」



音楽のまち、いわき。最新の音響設備を整え、地元の音響会社と協力して爆音上映も実施している。映画に合わせて扮装して社長自ら盛り上げた。

そこには、鈴木さんの「映画館は単なる箱ではなく、まさに活気を呼ぶ“客寄せパンダ”」という哲学があります。名画座は大手映画館のような資本力はありませんが、これからはいわき市のまちの未来への灯であり続けるでしょう。

夏休みにいわきに家族旅行に行く予定の方もいらっしゃることでしょ。暑さを避けてハワイの雰囲気を感じさせる映画館での思い出作りはいかがでしょう。

上映スケジュール まちポレいわき→ <https://machipole-iwaki.com/>  
はこちらから ポレポレシネマズいわき小名浜→ <https://polepole-cinemas.com/>